

都立高校生の「社会的・職業的自立」とは、将来、社会の一員として、あるいは職業人として生活していくために必要な能力（自己理解、他者理解、コミュニケーション力、基礎的・汎用的能力など）を身に付け、社会や職業の実態を理解した上で、より良い生き方を選択し行動する意欲を持つことを指します。

今回は、社会的・職業的自立に向けて都立高校で行っている2つの事業を御紹介します！

Thema
01未然防止モデルの
確立に向けて
～校内居場所カフェ～

東京都教育委員会では、都立高校生の社会的・職業的自立と不登校等への対応として、福祉や就労に関する専門的な知識・技術を有する「ユースソーシャルワーカー（以下YSW）」を都立学校に派遣する事業を推進しています※。生徒が抱える学習、生活、家庭等の様々な課題に対する相談支援等を行うことにより、生徒一人一人の社会的・職業的自立を目指しています。

その中で令和6年度から始まった事業が、「校内居場所カフェ」です。



※都立学校「自立支援チーム」派遣事業の詳細はこちら

早期発見解決を目指して

東京都教育委員会では必要に応じて都立学校にYSWを派遣し、生徒への相談支援や外部機関との連携を行っています。しかし、生徒とYSWがつながったときには、すでに生徒の抱える問題が深刻化してしまっていることがあります。

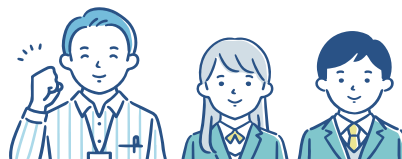
そのため、問題が深刻化する前に状況を把握し、早期に支援する「未然防止モデル」を確立することが重要です。

そこで、チャレンジスクール*である小台橋高等学校と立川緑高等学校に、生徒が日常的に立ち寄ることのできる「校内居場所カフェ」を設置しました。校内居場所カフェでは、YSWや運

営スタッフが、生徒と一緒にボードゲームなどを楽しみながら交流します。こうした交流を通じて生徒が抱える不安や悩みを早期に発見し、必要に応じて専門的な支援へつなげています。

生徒にとっての安心・安全な居場所として、登校するモチベーションの向上にも寄与することを目指しています。

今回は、令和7年度に設置された立川緑高等学校の校内居場所カフェについて詳しく御紹介します。



*チャレンジスクール…主に小・中学校での不登校の経験や高校での中途退学の経験により、これまで能力や適性を十分に生かしきれなかった生徒が、自分の目標を見つけ、それに向かってチャレンジする高校です。



石田和仁校長先生に
インタビュー

校長先生が語る
カフェの可能性

Q&A

Q カフェの様子を教えてください

A 温かく生徒を迎え入れている雰囲気があります。「おはよう!」「こんにちは」……カフェのYSWやスタッフから声をかけることで、「よく来たね」という気持ちを生徒たちに伝えていきます。その影響もあり、生徒たちも互いに声をかけあえるようになってきています。



担当 YSW が紹介

立川緑高等学校の校内居場所カフェ

正門を入るとすぐ目に飛び込んでくるのが、私が訪問させていただいている立川緑高校の校内居場所カフェです。相談ありきの場所ではなく「ホッとする」「楽しい」「やってみたい」といった気持ちに応えられる場所になることを大切にしています。

受付にはボードゲームやスケッチブック、画材などがあり、看板のイラストは絵の得意な生徒さんが描いてくださいました。大人数が集まれる大きな机には1000ピースのジグソーパズルが置いてあり、生徒さんの手によって少しずつ埋められてきています。すでに完成したものは壁に飾ってあります。7月には生徒さんとスタッフが一緒に作った七夕の短冊や折り紙飾りが中庭へと続く壁を彩り、通りがかった方の目をひいていました。

カフェにはYSWと地域の方を中心としたカフェスタッフがおり、全員緑のエプロンを着ています。おおよそ2名から6名ほどがスペースで生徒さんをお待ちしています。友人とも家族とも違う関係を築き、先生方の指導とは別の角度から関わる人として、「第三の居場所」になれるよう意識しています。

生徒さんからはカフェに置いてほしい物品のアイデアをもらったり、最近のトレンドを教えてもらったり、片づけを手伝ってもらったりしています。

生徒さんの最善の利益のために、YSWとカフェスタッフが協力し合っています。YSWには児童福祉や社会保障に詳しい人、キャリア教育や働くことに詳しい人など様々。「大学生ってどんな生活している?」「編み物をやりたい!」「バイトの面接はどうしよう?」そんな時にはカフェスタッフが丁寧に話を聞いています。ゆったりした時間のなかで、生徒さんから聴こえてくる声は、なりたい自分や学業、お家やバイト、友人や恋愛のことなど様々です。校内居場所カフェに来るとモヤモヤした気持ちを自然と口にしてくれるのかもしれない。希望を叶えようと一歩踏み出すときは、学校の先生方とスクラムを組んで応援しています。生徒さんに居場所カフェを選んでいただける限り、私も同じ時代を生きる一人の人間として一緒に居続けたいです。



Q 校内居場所カフェをやってみて、どんな効果がありましたか?

A 予約を取らなくても気軽に話ができることで、様々な悩みを抱えた生徒たちにとって幅広いセーフティネットとなっています。まず話を聞いてくれて、受け止めてくれる。受け止めた後、必要に応じて支援につなげていく……といった流れができてきたことで、関係機関との連携も円滑に行うことができています。

Q 今後はどんなことに期待していますか?

A 開校と同時に、いわゆるサードプレイスである校内居場所カフェをやってみて、有形無形の効果がありました。学校によって様々な事情はあるでしょうが、気軽に話ができる校内居場所カフェのような取組は、多くの学校でやってほしいと思っています。自立に向けて悩みが多い年頃である生徒に、寄り添える人が多くいることは、とても大切であると改めて感じています。

総合学科高校に おける NPO等と連携した 社会人基礎力向上事業

※企業・大学・NPO等とのネットワークをつくり、子供たちに豊かで、多様な体験学習が提供できるようサポートし、活性化していく仕組みづくりを目指して、東京都教育委員会が2005(平成17)年8月に設置



東京都では、令和5年度より、都立総合学科高等学校において、NPO等と連携した「社会人基礎力向上事業」を実施しています。この事業は、生徒の社会貢献意識を高め、地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な、社会人基礎力(「前に踏み出す力」、「考え抜く力」及び「チームで働く力」)を育成することを目的としています。

「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」*の会員団体である青少年教育支援NPO等が、学校設定科目「産業社会と人間」のカリキュラムづくりや「課題研究」に取り組む個々の生徒の学びをサポートします。また、放課後や土日、長期休業期間等には、企業や地域社会とつながる実践的・体験的な学習機会を提供しています。

都立総合学科高校10校のうち、令和5～6年度は世田谷総合高等学校、王子総合高等学校の2校で実施し、令和7年度より、つばさ総合高等学校、町田総合高等学校の2校も加わって、計4校で実施しています。今回は、新規校2校の取組と、3年目を迎えた継続校2校の成果について、実施団体によるレポートと実施校の校長によるメッセージで御紹介します。

新規

つばさ総合高等学校

実施団体：一般社団法人Fora

総合学科に対する認識の共有

学校との打合せを進める中で、学校に対する理解を深め、現場の教員を含む学校側との信頼関係を構築することからスタートしました。履修においては、「自由に選ぶことができる権利と責任」をキーワードに、総合学科における日々のキャリア教育カリキュラムの検討を進めています。

活動
内容

- ・既存のキャリア教育カリキュラムへの理解
- ・令和7年度4月のつばさゼミの企画調整
- ・キャリア教育に関する授業の監修

つばさゼミの紹介

つばさゼミとは、総合学科における学びの土台を作る2日間のプログラムです。

1日目 100以上ある学内の施設探検とつばさ総合で育む「つばさスキル」の理解を行いました。

2日目 卒業生を含む大学生や教員からつばさ総合での学びのヒントとなる話をしてもらい、実際につばさ総合にどんな授業があるのか周知を図りました。

2日間かけて、学校のことや自分と真剣に向き合い、「この学校に来た真の目的」を生徒たち一人一人が言語化しました。

メッセージ

本事業は、一般社団法人Foraさんと連携し、昨年までの授業を改善し3年間のキャリア教育に基づき、指導計画を立案して、授業にて実践しています。本校では、社会で求められる社会人基礎力を6つの身に付けさせたい力、「つばさスキル」として再定義し、授業や学校行事において指導のねらいを明確にしています。1年次では、Foraさんと指導案を練り上げ、「産業社会と人間」の授業や2日間に渡る「つばさゼミ」を開催するとともに、2年次生には系列履修ガイダンスを実施していただきました。教員とは異なる観点からの幅の広い講義に生徒たちも目を輝かせながら真剣に取り組んでいました。10月には、探究活動で学んだ成果を「結翔祭」と称して、Foraさんと中学生や広く都民に向けて本校の魅力を発信いたします。



つばさ総合高等学校
渡辺 仁 校長

総合学科高校って? ～生涯学習社会の実現を目指して～

総合学科は、平成6年度に、普通科と専門学科の特性を統合した新たな学科として創設されました。生徒の個性を生かして主体的に学ぶ単位制の高校で、生涯学習社会への移行に向けて期待されています。

総合学科の 科目の特色

- 幅広い選択科目から自分の特性や進路希望に合った科目を選択し、自分の時間割をつくる
- 「産業社会と人間」| 1年次 | …自分の生き方や将来の進路を考える
- 「課題研究」| 3年次 | ………自らの知的好奇心等に基づいて課題を設定し、その解決を図る

初年度の取組は、とうきょうの地域教育No.149特集「総合学科高校におけるNPO等と連携した社会人基礎力向上事業～「人生100年時代の社会人基礎力」を身に付けるためには～」で紹介しています



新規

町田総合高等学校

実施団体：特定非営利活動法人リトリト

町田総合高校とのこれまでの連携

特定非営利活動法人リトリトは、令和3年度から6年度まで東京都教育委員会から「地域探究推進校」に指定された町田総合高校において、多様な学びの実践に携わってきました。その期間、1年次の科目「産業と社会」における地域連携プログラム「町田市探究」では大学生を派遣し、生徒の探究活動を支援しました。また、キャリア教育の授業においては、生徒が自分自身について深く考えるワークショップを実施し、主体的な学びを促進しました。これらの取組を通じて得られた経験を基盤に、学校と協働しながら継続的なキャリア教育の実現に向けた新たな枠組づくりを進めています。

地域連携を続けていくために

令和7年度からは、新たな枠組のもとでこれまで高校が実施してきた教育プログラムを継承しています。具体的には、令和6年度「町田市探究」で連携した地域団体と協力し、生徒が実際に活動に参加する「夏の体験活動」の場を整えました。さらに、10月から始まる「町田市探究」に向けて探究ワークショップを実施し、その後の計画や連携団体との調整も進めています。また、1年次の科目「産業と社会」に大学生をファシリテーターとして派遣したり、「学生ファシリテーターによる大学・進路説明会」も開催したりしています。これらの取組を通じて、継続的で安定したキャリア教育の実現を目指しています。



メッセージ

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促すため、本校では近隣の高等教育機関、町田市役所、地域の協議会、民間企業等とのコンソーシアムを構築することで探究活動の質を向上し、生徒の資質・能力の向上に取り組んでいます。今後ともこのような教育スキームを継続的に生徒へ提供し続けることが重要であり、学校とNPOとの連携による授業計画の立案と実践によって、それが実現しようとしています。学校が構築してきた教育プログラムを継承し、NPOが外部連携の主体となって年間授業計画・評価計画を教員とともに立案、実践していくことで、継続的に安定したキャリア教育を実施することができます。また、様々な取組を確実に積み重ねることによって、NPOによる新たな教育プログラムの開発にもつながると期待しています。学校教育におけるアウトソーシングの推進が喫緊の課題です。



町田総合高等学校
後藤 洋士 校長

一人一人の学びの個別化を後押しする

「産業社会と人間」「人間と社会・総合的な探究の時間」「課題研究」のサポート、校内の一室（硝子工芸実習室）での「放課後の居場所づくり」を通して、学校と社会をつなぎ、生徒一人一人

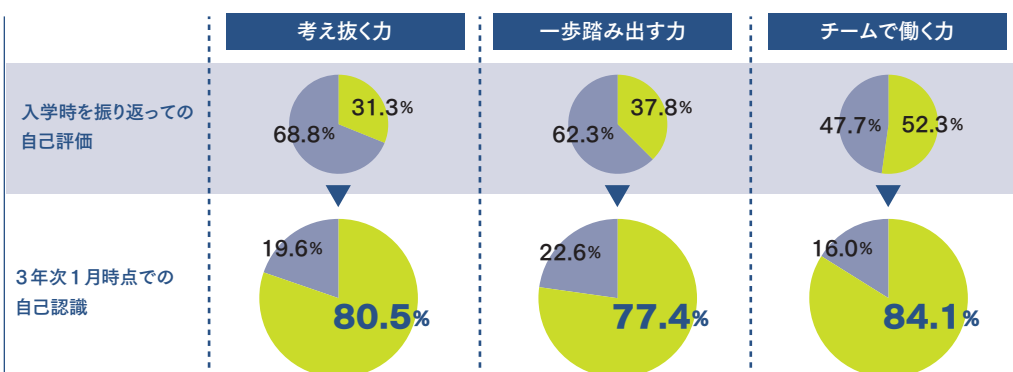
の学びの個別化を後押ししています。授業及び放課後の包括的なサポートをして、生徒一人一人の学びを促進し、それを通じた社会人基礎力の向上を目指しています。

数値で見る成果～3年間の学校生活を通じた入学時と3年次時点での社会人基礎力の向上の自己認識

令和7年1月に3年生106名にアンケートを実施。

多くの生徒が3年間のキャリア教育を通じて、社会人基礎力の向上を感じていると回答しました。

■ それぞれの力の質問項目（3問～4問）の【できる・ある程度できる】の合計平均
■ それ以外の回答の合計平均



令和6年度卒業生へのインタビュー 得られた経験や成長



居場所であり、成長できる環境

ウィルドアさんは居場所と成長をくれました。進路・課題研究はもちろん、日常的な悩みや考えと一緒に整理してもらい、自分や他人の感情・考えを広く受け止められるようになりました。授業ではゲストとの交流や自分の意見をまとめる機会も増え、大学のレポートや自分のキャリアを考える上で、考え抜く力も身に付きました。



視野が広がり、自分の可能性に気づけた

「ウィルドアの部屋」では課題研究の相談をよくしました。エコツーリズムツアーを行う人を紹介してもらい、その方から「ツアーを自分でやってみたら？」と提案を受け、実際に実施したことで、アクションを起こすと自分の視野と可能性が広がることに気づけました。この経験は、進学後も様々な人や機会に自ら働きかけようと思える姿勢につながっています。

取組の様子

共感したり
掘り下げたりしてくれると
自信がっく！



授業支援

90名以上のゲストを招待し、多様な出会いを届けています。

放課後支援

放課後の居場所を開室
自習や進路相談、プロジェクト活動の支援をしています。

自分より経験のある人達から
アドバイスがもらえると
説得力があふ、参考になる！

学校の中だけで
学校じゃない感じで
落ち着ける！



「遊びでもなく、勉強でもない」、みんなの居場所になっていて楽しい！

困っていることも一緒に考えてくれる、コミュニケーション力が上がった気がする。

メッセージ

世の中を知り自分を見つける総合学科において、ウィルドアさんの社会との接点づくりへの支援や思考を深める対話的助言により、生徒は大きく成長しました。生徒だけでなく学校全体の指導力も高まり、キャリア教育の根幹をなすキャリアデザイン（産業社会と人間）、総合的な探究の時間、課題研究だけでなく、普段の授業への取組や学ぶ意欲の向上が見られ、生徒が今まで以上に元気になっています。

今後も、学校とウィルドアさんとの並走により、それぞれが持つ力をさらに高め合い、生徒が社会人としてより一層活躍できる力の育成に取組んでいくことで、生徒、そして卒業生がさらに輝いていくことを願っています。



世田谷総合高等学校
田川 健太 校長

キャリア教育を“つなげる”役割

「3年間の成長ステップを教員にも生徒にも可視化する」これを、団体と現場の教員間で初年度より大切にしています。王子総合高校が目指す独自のキャリア教育に対して、学校外の教育資源との連携をサポートしつつ、最終的に学校が自ら目的を持って運用できるカリキュラムにつなげることを目指しています。



これまでの関わりとこれから

1年目

既存カリキュラムの見直しと
必要に応じたカスタマイズ

1年目は、既存カリキュラムの見直しや新規授業の開発を通じて、生徒の「自己理解」と「情報収集・整理力」の育成を重視しました。年度末には、3年間で目指す成長ステップを可視化するための評価指標を作成しました。

2年目

個別の課題研究等に向け
学外から人員派遣を充実

2年目は、個別の課題研究の充実に力を入れました。テーマ設計のための教材開発に加え、大学生・社会人との接点をコーディネートしました。相談の機会が増えたことで、3年生が提出した論文は1万字を超えるものが例年より多くなりました。

3年目

学校内の自走と持続化を
目標に学内連携をさらに強化

3年目は、課題研究についての教員研修の実施や、2年次の総合的な探究の時間の授業に対する企画、制作を通じて、王子総合の探究活動のアップデートに取り組んでいます。生徒が納得でき、かつ、楽しめるテーマを設定できるようになりました。

取組の
様子

教員向け研修会

教員と課題研究の研究手法や指導法を学びました



プレ探究

2年次では、新しいクラスの仲間作りや修学旅行をテーマに企画制作を行いました

現場教員からの声

Foraさんは、“外部業者”ではなく、校内の“伴走者”だと感じています。授業設計の企画運営等において、私たちの思考を整理して具体案に落とし込んでくれるので、準備負担が減り、生徒支援に集中できます。単発のワークショップを提供する形式ではなく、学校の状況を理解した上で、柔軟な提案と人材ネットワークで授業の質を押し上げてくれました。改革を目指し始めた時期に、継続的に寄り添える存在としてとても感謝しています。校内の知見も共有化され、年度を重ねるごとに再現性が高まっています。



メッセージ

王子総合のキャリア教育は、「Design Your Dream 夢の設計図を描こう!」というコンセプトのもと、1年次「産業社会と人間」、2年次「総合的な探究の時間」、3年次では自分のテーマを深めて発表する「課題研究」、そして進路実現へとストーリー化することを目指しています。王子総合独自のキャリア教育プログラムを体系化するため、3年前から一般社団法人Foraさんに伴走していただきながら、今年度ようやくそのロードマップ完成にこぎつけることができました。今後は毎年ブラッシュアップしていきます。

王子総合には、生徒5人に1人の担当教員がつく「O:王子総合C:キャリアA;アドバイザーシステム」があり、生徒はマッチングされたOCA教員と課題研究でつながり、進路指導まで頼ることができます。しかし、生徒の多様なテーマに教員だけでは対応が難しいのが現状です。今後は、課題研究に必要な「探究プロセス」を導く探究アドバイザー（大学生、社会人）や学校外の教育資源（大学、企業）との連携につなげるためのコーディネーター、今年度から導入された都立AIの効果的な活用方法など、Foraさんの支援を大いに期待しています。



王子総合高等学校
阿久津 恵理子 校長